

「日本理解」のための取り組み

田中哲哉

はじめに

独立行政法人国際交流基金関西国際センター（以下、センター）では、さまざまな目的別日本語研修と日本語学習奨励研修が実施されている。いずれの研修にも共通しているのは、「日本語能力の向上」とともに「文化や社会など、日本についての理解（以下、「日本理解」とする）を深めること」が、中心的な目標の一つに設定されていることである。そして、この「日本理解」を目的として講義、文化体験、研修旅行などのプログラムを実施している。

しかし、現時点では「日本理解」の内容は、明確にシラバス化されているわけではない。理由としては、（a）その内容がきわめて膨大かつ複雑であり、情緒的あるいは感性的な側面を含んでいること、（b）研修参加者が滞日中に学習あるいは経験したい「日本社会」および「日本文化」の中身が非常に多様であること等による困難さがあげられる。加えて、シラバス化することの是非についての検討も必要であろう。

このため、現状では各研修担当者が調査票（各研修参加者から研修開始前に回収）に記載されている、研修参

加者の要望やニーズ、あるいは過去の類似研修プログラムの研修修了時点における満足度調査等で把握した情報を勘案しつつ、試行錯誤を重ねながら「日本理解」を促進するための各種プログラムを企画している。

ただ、試行錯誤を重ねつつあるといっても、センターは開所以来六年を経過し、「日本理解」に関するプログラムも淘汰されるべきものは淘汰されてきているはずであり、また、センター全体としての「日本理解」の内容も方法もある程度はコンセンサスが形成されてきている。本稿では、「何を」「どのように」ということを中心に、センターの「日本理解」を深めるための取り組みを紹介する。

一．センターにおける「社会文化プログラム」

一・二．「日本理解」に関わるプログラムの分類

センターでの「日本理解」に関わるプログラムは、さまざまなものがあるが、日本語学習との関係から、次の三つに分類して考察を進めることにする。

A 日本語学習が主たる目的のもの

B 日本語学習が主たる目的ではないもの

C AとBの中間的なもの

Aの例としては、日本の文化や社会をテーマとした読

解や聴解の授業のほか、場面を設定した会話の授業などでも文化や社会的な要素が関与してくる。Bの例としては、研修旅行や文化体験、文化や社会についての日本語以外での講義などがある。Cの例としては、「日本理解」と日本語のスキル向上の両方を目的とした日本語履修大学生訪日研修（以下、大学生研修）の科目の一つである「日本理解」（授業名）などがある（注1）。本稿では、Bを「社会文化プログラム」と呼ぶことにする。次節では、まず、この「文化社会プログラム」で、「何を」実施してきたかを紹介する。目的別日本語研修である外交官・公務員日本語研修（以下、外交官・公務員研修）（注2）と日本語学習奨励研修に属する大学生研修の二つの研修を取り上げ、その「社会文化プログラム」の実施状況を見てみる。

一・二・「社会文化プログラム」の内容

平成十三年度の外交官・公務員研修（九ヶ月）と平成十三年度秋季の大学生研修（六週間）の「社会文化プログラム」をまとめたものが、それぞれ表1と表2である。これらは、主として研修参加者の希望とニーズによって選ばれ、研修修了時のアンケートで満足度の低いものは次の年度の研修から削除あるいは入れ替えを行う。

研修の実施期間が異なるため、回数にかなり差が見られるが、研修旅行や文化鑑賞のためのガイド、文化体験、施設や学校への訪問、ホームステイ・ビジット、日本人との交流などは外交官・公務員研修、大学生研修に共通のものとなっている。

研修旅行の狙いはさまざまな日本と接することであり、近代的な地域と伝統的な要素の強く残る地域が選ばれている。大阪オリエンテリングや難波ツアーは関西での交通アクセスに慣れることも目標としている。同じ理由で、外交官・公務員研修の場合、研修開始直後の東京研修旅行では、ほとんどの研修参加者が日本語学習開始から一週間というときに、引率なしでセンターに帰還するようにタスクが設定されている。

文化体験、文化鑑賞は、研修参加者の希望から、いわゆる「伝統的文化」が対象となっている。知識だけ持っている「伝統文化」に直に触れてみたいという要望は強い。九カ月や六カ月の長期研修では、文化体験にはリクリエーションの意味もある。バランスをとる意味で、施設訪問は「現代的」な所が対象となっている。学校訪問は、日本の社会を知るという目的もあるが、受け入れ先から「国際理解教育」などの目的で来校を望む声も多く、全研修で共通して実施されている（注3）。

表1 平成13年度外交官・公務員研修「社会文化プログラム」

外務省職員との交流(2回)		ホームビジット	
外務省研修所研修員との交流(2回)		ホームステイ	
大使館実習		交 流	田尻町地域ガイド
省庁訪問			地域での交流(3回)
研 修 旅 行	東京		ビジネスマンとの交流(2回)
	京都・奈良		大学生との交流(2回)
	広島		日本人と話そう(3回)
	奈良	旅 行 ガ イ ド	大阪
伊勢・志摩	東京		
自主研修旅行	京都・奈良		
文 化 体 験	だんじり祭		広島
	正月の遊び	日 本 事 情	日本の家族
	華道		日本のビジネスマンと働く女性
	書道		宗教
	茶道		日本のイメージ
	邦楽	文化摩擦	
	陶芸	社 会 文 化 講 義	能と狂言について
	着付け		戦後日本経済(2回)
	香道		日本語の歴史と外国語
文 化 鑑 賞	能・狂言		日本国憲法(3回)
	すもう		日本の歴史について(2回)
	邦楽		日本政治外交史(3回)
	映画(七人の侍)		21世紀の日本と世界について
施 設 訪 問	関西国際空港		日本美術史
	国会議事堂		現代の政治・外交問題
	シャープ天理工場		日本の文化～折衷主義について
	学 校 訪 問		小学校訪問
中学校訪問		※()内は複数回の場合の実施回数	
高校訪問			
専門学校訪問			
大学訪問			

また、全体的に、体験的なプログラムが主体であることも共通している。これは、訪日研修の利点が社会的リソースの活用であると考え、当然の結果である。

一・三・ 研修の特性の反映

日本語の継続学習を奨励する目的で実施される大学生研修と異なり、目的別日本語研修の一つである外交官・公務員研修は、日本語学習経験がほとんどない研修参加者を対象に、職務上必要な日本語能力の養成を目指してコースがデザインされている。『社会文化プログラム』においても、研修参加者の外交官、公務員としての専門性を配慮した、外務省を始めとする日本の省庁や大使館への訪問や実習な

どのプログラムが取り入れてあることが、特徴の第一点である。これらは、日本の省庁や自国の大使館等のシステムや実情を理解することが目的であり、日本と関わる仕事を遂行していく上で重要なものである。また、研修旅行の一つである自主研修旅行では、日本に赴任して自国の訪問団のための旅行等のアレンジをする場合を想定し、自分で旅行計画を立て、手配するタスクが課せられている。社会文化講義の内容を見ても、「経済」「憲法」「政治外交」など、こちらも専門性が考慮されている。交流についても、相手としてビジネスマンが含まれているのは、同じ理由による。

表2 平成13年度秋季 大学生研修
「社会文化プログラム」

研修旅行	東京・箱根
	広島・京都・奈良
文化体験	華道
	書道
	茶道
	陶芸
	着付け
文化鑑賞	能・狂言
施設訪問	松下工場見学
学校訪問	中学校訪問
	高校訪問
ホームステイ	
交流	田尻町地域ガイド
	地域での交流
	NGO との交流
ビジターセッション(2回)	
発表会	
ガイド	大阪
	広島・京都・奈良旅行
	ホームステイ
	東京・箱根旅行
	能・狂言
	日本の音楽・芸能
大阪オリエンテーリング	

※()内は複数回の場合の実施回数

もう一つの特徴は、日本事情や社会文化講義などの講義形式が大学生研修と比べると多いことである。大半の研修参加者が日本語学習経験がほとんどない状態で研修を開始することから、いずれも英語で実施される。大学生研修と異なり、高等教育機関などで日本について専門的に学んだ研修参加者は少なく、日本についての知識はあまり期待できない。したがって、日本と関わりのある業務を遂行する上で持っていた方がいいと考えられる知識、情報のインプットが必要となる。以上観点から、「体験型—講義型」と「目的が研修参加者の専門性が考慮されたもの(専門的目的)—専門性が特に考慮されていないもの(一般的目的)」を軸にして、外交官・公務員研修と大学生研修の「社会文化プログラム」を四つの領域に分類、整理しなおしたのが図1と図2である。実線で囲まれているものは必修、点線で囲まれているものは選択プログラムである。これらの図から、研修の目的、特性によって「社会文化プログラム」の分布が異なっていることが確認できる。

図1 外交官公務員研修「社会文化プログラム」分布図 ()内は実施回数

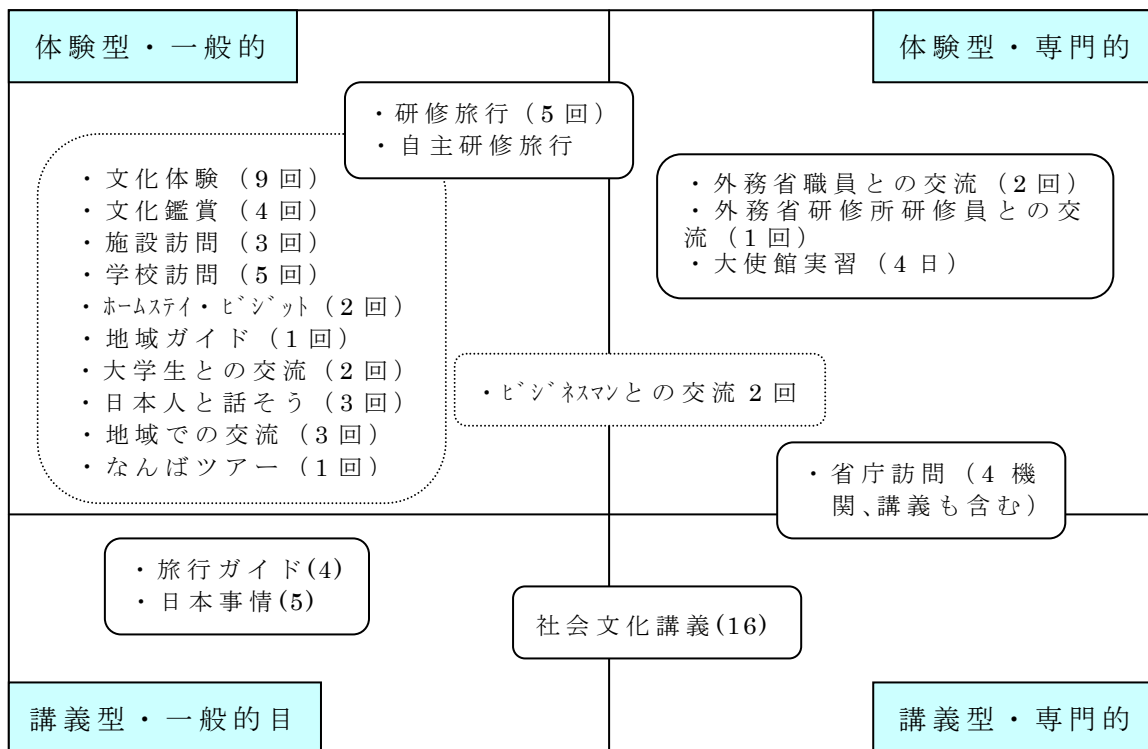
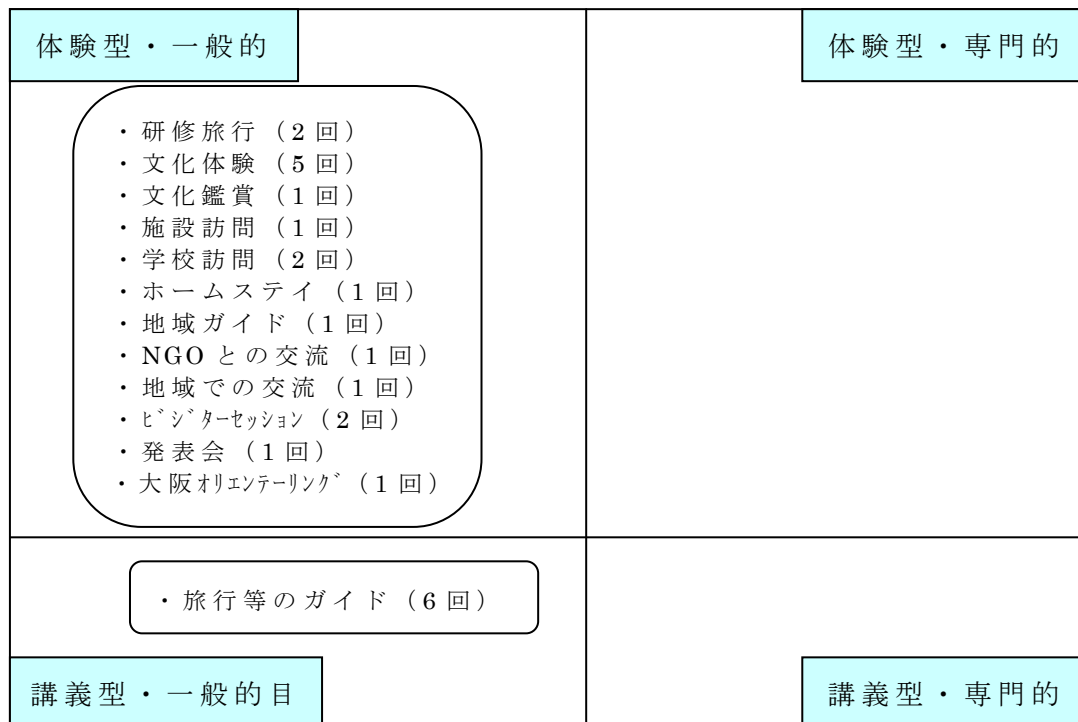


図2 大学生研修「社会文化プログラム」分布図 分布図 ()内は実施回数



二．プロセスを重視した取り組み

二・一．学習のサイクル

次に日本での体験や「社会文化プログラム」をできるだけ活用し、「どのように」理解を深めていくかを重視したものととして、大学生研修のプログラムを検証する。

体験学習について Kolb (一九八四) は、四つのステージによる学習サイクルを示して分析している。四つのステージとは、まず体験し (具体的体験 / Concrete Experience = CE)、次にその体験をふりかえり (内省的観察 / Reflective Observation = RO)、さらにそれを分析して仮説を立て (抽象概念化 / Abstract Conceptualization = AC)、仮説に基づいて行動する (実験試行 / Active Experimentation = AE) というものである。そして学習とは、このサイクルの循環的なプロセスである (注4)。

理解を深めるということは、情報や知識を広げるだけでなく、一つの問題についてこのようなサイクルを繰り返していくという側面もある。このプロセスは特別に学ばなければいけないものではなく、だれでもが生活していく上で行っているものである。しかし、大学生研修では、期間が六週間と限られていること、ステレオタイプ的な知識の習得だけに終わらせたくないことから、「日本

理解」を深めるため、このような学習サイクルをカリキュラムに組み込み、研修参加者にこのサイクルを意識化させることを試みた。

二・二．大学生研修の学習サイクル

大学生研修では、「日本理解」を深めることを課題に、次のような学習サイクルを想定した。ここでは、日本人との交流から知見を得ることも、体験の一つと考える。

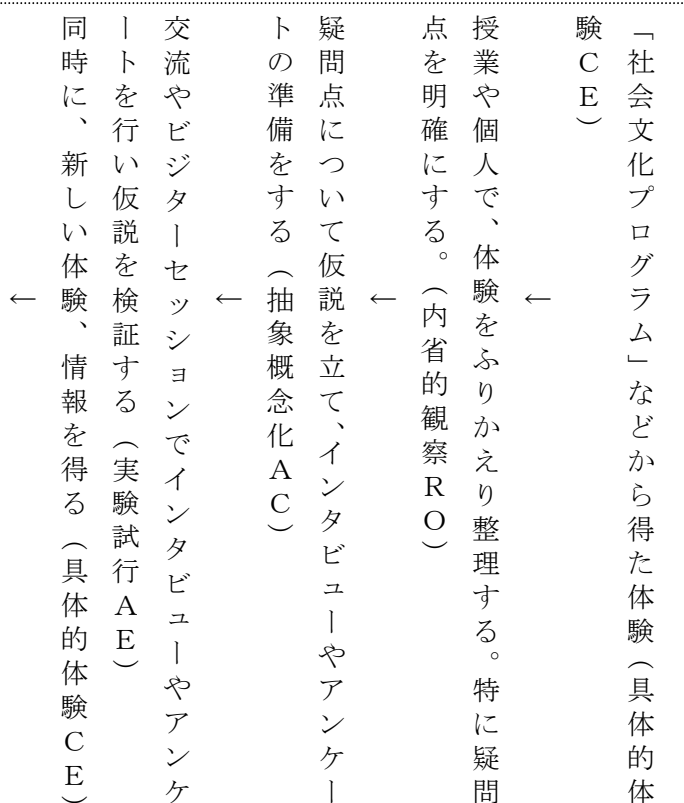
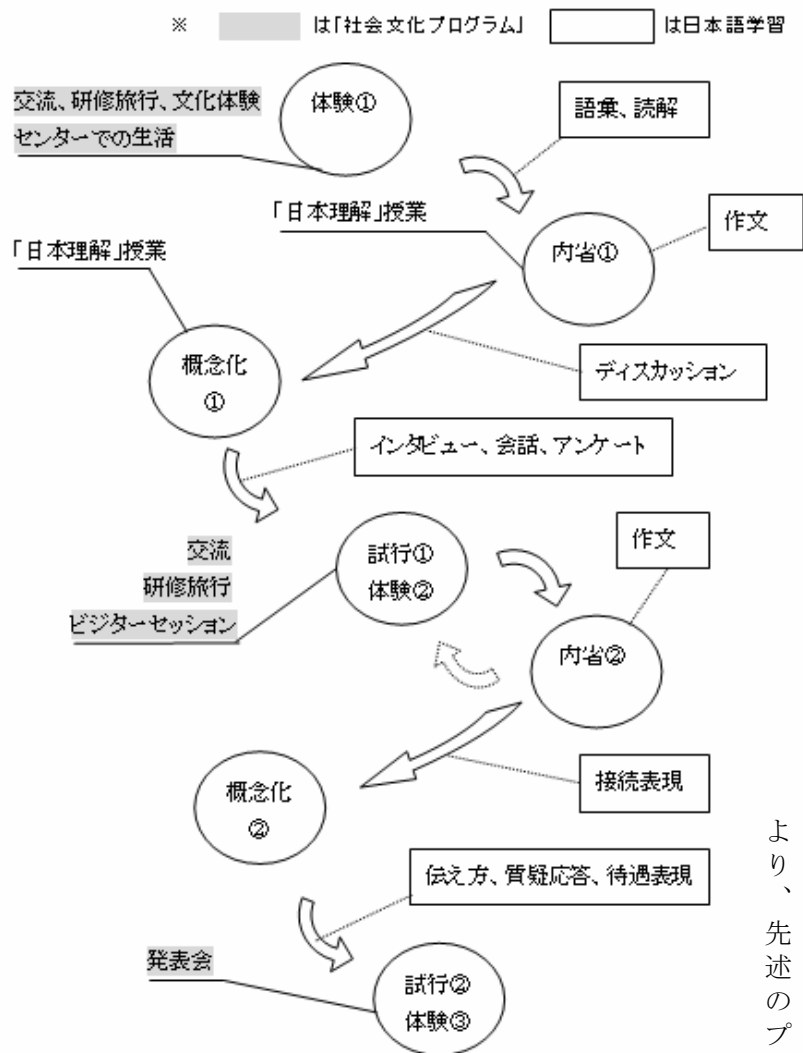


図3 大学生研修の「日本理解」のための学習プロセス



このプロセスを具体的に示したのが図3である。図の中に
ある「日本理解」というのは、授業の名称である。日本語を使
い日本について学ぶという、一・二・三の分類に従えば、Cに
分類されるものである。授業の目的は、知識をインプットする
ことではなく、教育や若者文化など

現代日本の問題や社会現象を提示して、それを教師と一緒に
に研修参加者が考えることである。したがって何かの結論を
出すものではなく、多様な情報を示すことによりステレオタイプ
的知識を崩し、「なぜ」という疑問点を意識化していくことが
目的となる。そして、この「日本理解」授業と「社会文化
プログラム」をリンクすることにより、先述のプロセスを具
現化していく（注5）。

まず、日本人との交流や研修旅行、センターでの生活で「日本」を体験する（体験①）。次に既存の知識や授業で得た情報と照らし合わせ、またクラスでのディスカッションや作文を書くことにより、体験を整理する。その中で疑問が残った点を明確にしておく（内省①）。次に理解できなかったことについてインタビューやアンケートを準備する。その作業を通じて仮説を立てる（概念化①）。そして、ビジターセッションや交流でインタビューやアンケートを行い、仮説を検証する（試行①）。同時に、そこで新たな知見を得たり、体験をする（体験②）。その体験、知見を整理し、新たな疑問点が出れば、また、仮説を立て、検証していく。疑問点が出なくても、インタビューの相手が変わることにより、得られる知見が変容していくこともある。インタビューやアンケートは、センターが準備した機会にとどまるものではない。自主的に街頭インタビューをしたり、いろいろな施設を訪問する研修参加者も多い。

また、このプロセスを通じて、日本語の学習として語彙の拡大や読解、ディスカッション、インタビュー、アンケートなどのスキルを向上させていく。実際に使用するスキルのため、研修参加者の日本語学習動機を高めることにもつながる。

最後に研修修了時に行う発表会に向け、一つのトピックを選び、それまでに得られた情報や知見を整理する。いわゆるKJ法を用いて、小さな用紙にわかったことを書き、それをボードに張りながら分析することもある（内省②）。それを基に仮説を組み立て（概念化②）、発表する（試行②）。そして、発表会に参加した聴衆とのやり取りから新しい知見が得られる場合もあった。発表会で聴衆に質問を投げかける研修生もいた（体験③）。日本語学習として、ここでは、発表会のための待遇表現、仮説を紹介するための論理的な表現、プレゼンテーションを効果的にするためのスキルなどを学ぶ。

もちろん、体験からではなく「日本理解」授業でのインプットから疑問をもち始めてプロセスが始まったり、発表会でも概念化まで進めなかったり、あるいは一方的な発表になる場合もある。

二・三．プロセスから得られるもの

学習サイクルによるプロセスの実例をあげてみよう。大阪の難波や東京への研修旅行で日本の若者のファッション、特に茶髪が話題になった（体験）。「日本理解」の授業で若者文化を取り上げたとき、「伝統が強く残る日本で、なぜ髪の毛を染める若者が多いのか」「変だ」「髪の毛

毛を染めるのは、真面目な若者ではない」という否定的な意見が多く出た(内省)。ディスカッションを通して「自己主張」「伝統への反発」「日本人のアメリカ志向が原因」などの仮説が立てられた(概念化)。同時に、アメリカ志向は自分たちにも同じ傾向があるという意見が多く出された。

その後の大学生とのビジュアライゼーションで、茶髪について、アメリカについてのインタビューが行われた(試行)。ビジュアライゼーションには、茶髪の学生もかなり参加していた。質問への回答は、「アメリカへの憧れは、それほどない」「茶髪はファッションの一つ。みんながするから始めた」「伝統への反発はない」というようなものだった。茶髪の学生についての研修参加者の印象も「普通の学生」だった(体験)。次にセンター近隣の三十代から五十代の主婦中心のグループとの交流があり、ここでも若者の茶髪について質問をした(試行)。日本人からは、茶髪について、それほど悪い印象がないという回答が多かった(体験)。これは授業で読んだ新聞記事の内容と異なるものだった(内省)。

あるグループは若者のファッションを発表会のテーマに選んだ。このグループは大阪の繁華街へでかけ、街頭で出会った日本の若者たちにインタビューとビデオ撮

影を試みた(試行、体験)。発表は染髪やピアスについてで、「来日後は、髪を染めたりピアスをしている若者が多くて驚いた」「伝統への反発や特別な欧米志向は見られない」「少し怖い印象があったが、インタビューをしたら、とても親切で、ふつうの若者だった」「個性を出したいというのが理由だと思ったが、全体では、みんながしているからする」という人が多かった」というような内容だった(内省、概念化)。日本人の聴衆は、発表を聞き、ほとんどが「知らなかった」「ピアスの若者についてのイメージが変わった」というような驚きの声が多かった。この反応は発表者にとって新しい発見だった(体験)。

研修参加者の変化を見ると、最初は「日本は伝統を大切にしている」というようなステレオタイプ的な知識が、日本での経験で再考を迫られ、いろいろな分析、仮説を立て、それを交流の場で検証、再構築している。そして、理解が進むにつれて否定的な発言は減少していった。結論の内容は、それほど深いものではなかった。しかし、現実の日本は教科書に出てくるような単純明快なものではないことは理解できたはずである。また、マスメディアと実際の声とにギャップのある場合があるという気づきもあった。さらに、この過程で自己についての新たな認識が加えられたことは、異文化の理解が自己と

の対比から始まることを考えると重要である。そして、より重要なことは個々の情報より、自分と異なる社会・文化について、単純な情報の鵜呑みでもなく拒絶でもなく、体験したことや情報を分析し、そこから疑問点に気づき、仮説を立て検証するといったプロセスを意識的に行うことを学習することである。つまり、「日本理解」の内容の拡充に加えて、理解のプロセスの支援が狙いとなっている（注6）。

三・今後の課題

三・一・理解の深まりの評価

以上、センターの「日本理解」を深める取組みについて、「何を」「どのように」という視点から見てきたが、理解の深まりをどのように評価するかというのは、難しい問題である。例えば、大学生研修では研修の締めくくりとして研修参加者自身による自己評価と教師からのコメントという方法をとっているが、特に期間が短い研修の場合、研修修了後に改めて体験からの内省、概念化といったプロセスが進行すると考えられ、理解の深まりについては、研修修了後も視野に入れて考える必要があると思われる。いずれにしても、テストなどで測定できるものではないだろう。

三・二・プログラム改善のための視点

では、研修参加者への「効果」の測定が難しいとしたら、プログラムを評価、改善していくのにどのような視点が考えられるだろうか。現在センターで行っているのは研修参加者の満足度による評価である。最初に述べたように、「社会文化プログラム」の内容は事前の研修参加者の希望とニーズ、研修の目的を考えて決定し、評価は研修修了時のアンケートの満足度で行っている。満足度が低いものは、その理由を明らかにし、内容を変更、もしくは廃止している。しかし、研修参加者が自分のニーズをすべて把握しているとは限らず、これ以外にもプログラムの改善のための、より客観的な視点が必要である。重要だと思われるものを三点挙げる。

① 研修全体の目的の反映度

目的別日本語研修と日本語学習奨励研修での比較で明らかのように、「社会文化プログラム」においても研修全体の目的、研修参加者の専門性が反映されていた。各プログラムの目的と研修全体の目的との関係が明確でなければならぬ。

② プログラムの内容のバランス

表1、表2からわかるように、例えば文化体験や文化

鑑賞の対象は、いわゆる伝統文化に限られている。逆に訪問施設は現代的なものに限られている。日本の多様性の理解を目指すなら、特に研修参加者の日本についての知識が限られる場合は、実施するプログラム決定に際しては、全体的な内容のバランスに配慮する必要がある。

③ 量的評価

研修を長期的、継続的に評価していく場合、変化を見る指標の一つとして量的な視点も有効である。研修全体から「社会文化プログラム」を評価していく場合、例えば、その回数や種類の数、交流相手の参加者数などは、判断基準の一つになり得るだろう。数値が変化した場合、その理由と影響を明確にすることが要求されるからである。もちろん、多ければいいというような単純なものではないが、実践の積み重ねから適切な数値を導き出すことは可能だろう。

①と②を行うためには、「社会文化プログラム」の目的や性格を明確にする必要がある。現時点でも、各プログラムの目的は意識されているが、多様性を意識して全体でのバランスを見るためには、何か共通の視点が必要になってくる。そのためには、目的と内容のカテゴリー化が有効だと思われる。例えば、一・二・で見た「社会文化プログラム」については、交通機関の利用方法など、日

本での生活に関わるもの、伝統文化に属するもの、映画など大衆文化に属するもの、といったような分類が考えられる。今後、全体が俯瞰できるこのようなカテゴリーの作成が課題の一つである。

三・三・日本語授業との関連とリンク

本稿では、日本語学習が主たる目的のプログラム(分類A)での「日本理解」については、あまり触れられなかった。しかし、このような日本語授業においても、「日本理解」との関わりは大きい。日本語授業で、何がどう扱われているのかも分析していく必要がある。

さらに、大学生研修で見たように「社会文化プログラム」と日本語授業をリンクすることにより、内容を深めることができたり、学習の動機を高めることができたりと、双方にメリットがある。このようなプログラムの連動の形式や効果について考察を深めることも課題である。

注1 大学生研修および「日本理解」授業については、境田(二〇〇三)を参照のこと。

注2 外交官公務員研修については魚住(二〇〇三)を参照のこと。

注3 センターの交流プログラムについては逢坂(二〇

○三)を参照のこと。

注4 用語の日本語訳は磯貝友子(一九九八)による。

注5 小川(二〇〇二)は「日本事情」での知識の扱い方に関して、素材、刺激の機能として不可欠であり、内容に決定的な領域や拘束はなく、素材の提示は、素材によって学習者が検証したいと思うことと検証を援助できる準備をしておくことが重要だと述べている。

注6 川上(一九九九)は、文化を異質性、多様性があり、流動的で絶えず変化している動態的なものとしたうえで、「日本事情」の方法論として、日本文化・日本社会を見るために、「問題のたて方」を練習することであるとしている。

参考文献

- 磯貝友子(一九九八)「第7章異文化との出会い：カルチャー・ショックと異文化適応」『異文化トレーニング——ボーダレス社会を生きる』三修社
- 魚住悦子(二〇〇三)「関西国際センターにおける外交官・公務員への日本語研修」『日本語学』二月号、明治書院
- 逢坂浩二(二〇〇三)「長期研修における交流プログラム

について」『日本語学』八月号、明治書院

小川小百合(二〇〇二)「文化“知識”としての“日本事情”再考」『21世紀の「日本事情」——日本語教育から文化リテラシーへ』第4号、くろしお出版

川上郁雄(一九九九)「日本事情」教育における文化の問題」『21世紀の「日本事情」——日本語教育から文化リテラシーへ』創刊号、くろしお出版

境田徹(二〇〇三)「大学学部生への研修における日本語授業——新たな学習視点を啓発するための授業科目」『日本語学』七月号、明治書院

Kolb, D. (一九八四) *Experiential learning: Experience as the source of learning and development.* Englewood Cliffs: Prentice-Hall.

(たなか・てつや 独立行政法人国際交流基金関西国際センター日本語教育専門員)